

第六章 第三次高天神城の戦い

孤立する高天神城

天正三年（一五七五）五月二十一日の三河長篠の戦いが、遠州戦国史の、分水嶺^{みづわり}になった。このあと、武田方が完全に守勢にまわることになったのである。その動きは、早くもその年の六月から七月にかけてみられた。

家康は、まず、武田方の将依田下野守信守・右衛門佐信善父子の守る二俣城を攻めている。この城は、三方ヶ原の戦いの前哨戦において武田方に取られ、そのままになっていたところである。しかし、堅城である二俣城は容易に落ちず、家康は、対^{たい}の城、すなわち向城^{むかひしろ}として、鳥羽山城（天竜市二俣町）のほか、蟠^{たな}原砦・毘沙門堂砦・渡ヶ島砦（いずれも天竜市二俣町）を築いて長期戦の作戦をとった。この方法は、それに引き続く高天神城攻めに踏襲されている。

家康は、二俣城が簡単には落ちないとみて、包囲をさせたまま、光明城（天竜市大谷）を攻めさせているが、この方は、同年七月五日付の山県源四郎昌満宛の武田勝頼書状（相模孕石文書）に、「敵光明を摧^{くだ}き候」とみえるので、七月五日以前に落城していることがわかる。同じ書状の中で、勝頼は「諏訪・小山・高天神の用心簡要に候」といっており、武田方にとって、諏訪原城・小山城・高天神城の三城が最後の遠江防衛線の位置づけであったことがうかがわれる。ちなみに、山県源四郎昌満は、長篠の戦いで戦死した山県昌景の子で、このころは高天神城に入っていた。さて、光明城を落としたあと、家康は北遠における武田方有力部将である犬居城主の天野宮内右衛門尉藤秀・景貫父子にターゲットをしぼった。実は、家康による天野氏攻め、これまでは『浜松御在城記』や後述する『三河物語』の記述などによって、天正四年（一五七六）七月のこととされてきた。ところが、天正三年七月十三日付の領家郷に

宛てた家康の禁制があり（遠江秋葉神社保管文書）、光明城を落とした勢いで、徳川軍がそのまま天野氏の犬居領に
なだれこんでいったことが明らかである。

そのころ、天野氏は犬居城ではなく、樽山城（静岡県周智郡春野町田河内字樽山）にいた。徳川軍はまず樽山城を
攻め落とし、逃げる天野氏を追って勝坂城（静岡県周智郡春野町勝坂字猪ヶ鼻）も攻め、天野氏を北遠から追い払っ
ているのである。この戦いの模様は、年次を天正三年に訂正すれば『三河物語』が参考になるので、つぎに引用して
おく。

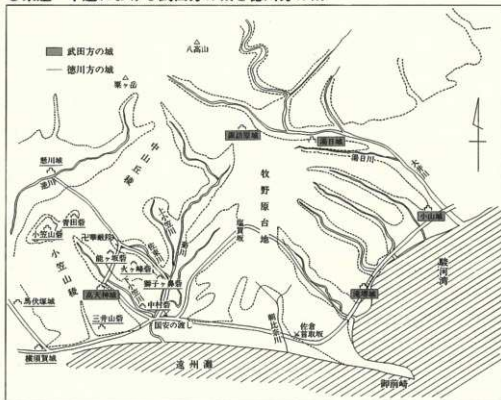
天正四年七月日、犬居へ御働有て、樽山の城を責取。其より勝坂へ押寄給へバ、潮を坂をもちて入立ざれば、大
久保七郎右衛門尉に、石が嶺へあがりて、嵩よりも追崩せと御意の候らへバ、お請を申て、七郎右衛門尉叶わじと
思ひて、潮坂と勝坂をあけて鹿鼻へ移りて引退きけり。

これで犬居城が落ちたも同じとなり、家康は、つぎにいよいよ諏訪原城（静岡県榛原郡金谷町牧野原）を本格的に
攻めることになった。諏訪原城は、すでに六月の時点から桜井松平忠正に攻めさせていたが容易に落ちず、八月二十
三日、家康自ら出陣し、本陣を日坂の久延寺に置いて本格的な城攻めを開始した。結局、翌二十四日、城兵は防戦か
なわず、城を捨てて小山城へ落ちていったのである。『武徳編年集成』に、「廿四日、諏訪原の城兵諸賀、小泉、海野、
遠山等終二拒き守る事を得ず、今夜密二是を避て小山城に走る。」とある。

ここまでは徳川軍の連戦連勝であった。考えてみればそれも当然で、長篠の戦いで大敗したショックで、武田勝頼
が全く動かなかつたからである。籠城の場合、後詰があつてはじめて活路が開かれるわけで、後詰のない籠城戦に勝
ち目は全くといってよいほどなかつたのである。

勝頼が出てこないといふ家康は、その勢いで小山城（榛原郡吉田町片岡）を攻めることにした。いわゆる「勝ちに

●東遠・中遠における武田方の城と徳川方の城



乗ずる」というものである。

そのころ、小山城は、それまでの城主だった大熊備前守長秀に代わり、三浦右馬助義教・朝比奈兵衛太夫秀盛・小原下野守忠国といった駿河先方衆のメンバーが入っていた。それに諏訪原城を落した兵も入り、かなりの軍勢を数えていた。

徳川軍は、松平康親・松平家忠・石川數正らを先鋒とし、本多忠勝らも加わっていたのである。徳川軍の中には、「勝頼が後詰にくるかもしれない」とする意見もあったが、大勢は「出てこれないだろう」ということで城攻めが開始されたわけであるが、ようやく、そのころになつて長篠のショックも薄らいだのか、勝頼が後詰に出てきたため、このときの徳川軍による小山城攻めは失敗に終わっている。

徳川軍が兵を引いたのが九月二十一日以前だったことは、つぎの勝頼の盛状（『土佐国竈簡集』所収文書）によってわかる。

今度小山地徳河取詰るの處、數日籠城、粉骨を盡く

さるの条、当城堅固、あわせて其の方戦功故に候。これに依つて後詰ごだての行存分まかに任せ、感悦せしめ候。自今以後、
弥忠節肝要たるべく候也。恐々謹言。
(天正三年乙未)

九月廿一日

勝頼（花押）

岡部丹波守殿

宛名の岡部丹波守は、さきにみた真幸＝元信＝長教＝長保のことである。このときはまだ小山城の守備についていたことがわかる。のち、天正七年（一五七九）から高天神城の城番に抜擢された理由の一つとして、このときの籠城における岡部丹波守の働きが勝頼の記憶にのこっていたためかもしれない。

小山城攻めには失敗したが、二俣城攻めの方は最終段階を迎えていた。対の城を築かれた状態で完全に孤立した二俣城では、ようやくその年の十二月中旬になって和平交渉がはじまった。結局、十二月二十四日、城兵は城を出、二俣城は再び家康の手にもどったのである。そして、城兵たちは、甲斐へはもどらず、何と、高天神城に入っている。このころ、遠江における武田方の城として残っていたのが高天神城と小山城の二つだけになってしまっていたからである。

家康による横須賀城と高天神六砦の築城

第二次高天神城の戦いで、城主小笠原長忠が武田方に寝返り、天正二年（一五七四）六月十七日から、城が武田方のものになってしまったため、家康は、高天神城に対する押さえるの城を築く必要にせまられた。そこで、八月一日、馬伏塚城（静岡県磐田郡浅羽町岡山）を修築し、これを高天神城に対する対の城（向城とも付城ともいう）として位

置づけ、大須賀五郎左衛門尉康高を入れたのである。

さて、この馬伏塚城であるが、従来の通説は、今川氏の時代、小笠原氏が居城していた馬伏塚城を再利用したものである考え方であった。ところが、この通説に対し、林隆平氏は「私説・馬伏塚城址」（『古城』一二号）の中で、ややがった考え方を展開している。ここでは、林氏の新説を紹介しながら、それに対する私見もつけ加えておくことにしよう。

林氏は、天正二年八月に家康によって築かれた馬伏塚城というのは、浅羽町岡山の馬伏塚城のことではなく、それより東南およそ一・五キロメートルほどのところにある通称「岡崎の城山」といわれる場所ではないかとした。その論拠の一つは、馬伏塚城址の遺構が、ほとんど自然地形のままで、あまり人の手が加えられていないという点である。そして、論拠のもう一つは、それに対し、「岡崎の城山」の方は、土地の土豪四宮氏よみやが築いたと伝えられている割りには人工的な部分が多く、今川氏の家臣四宮氏が作った城というには立派すぎるとする。林氏は結論として、「東西一五〇メートル、南北九〇メートル、中央附近を南北に水濠りと空堀りで分断して、東西に広域な曲輪を構成している城山の遺構を見るかぎり、事跡も詳かでない一土豪の成し得ざる縄張りであることが判る。したがって岡崎の城山は大須賀康高が奉行に任命され、高天神城攻略のため徳川氏の勢威をもって築き、諸將を各曲輪に配置して家康自ら号令した高天神攻略の初期の作戦本部と見るべきではなからうか。」としている。

これまで疑問をもたれることのなかった馬伏塚城が、天正二年修築の馬伏塚城ではなく、一土豪に過ぎない四宮氏の城とされてきた「岡崎の城山」の方がいわゆる馬伏塚城であるとする林氏の主張である。

では、この林隆平氏の新説は成りたつのだろうか。結論からいえば、この新説は大いに可能性があるかと私は考えている。というのは、「岡崎の城山」の縄張と築城技法に天正期築城の様子がうかがわれるからである。それと、当時

の地域概念からいって、馬伏塚城から一・五キロメートルほどしか離れていない「岡崎の城山」のあたりは、広い意味で馬伏塚の範囲に入り、「馬伏塚の城」とよばれていた可能性もあったのではないかとみている。

さて、家康はこのあと、さらに一歩進め、高天神城にもう少し近い横須賀に新しく城を築くことになった。これが横須賀城（静岡県小笠郡大須賀町松尾町）である。この横須賀城も、通説では天正六年（一五七八）三月二十一日に築城を開始し、同八年（一五八〇）に完成をみたということになっているが、それ以前の築城をうかがわせる史料もある。たとえば、「王子権現由来記」には、つぎのようにみえる。

徳川家康公三州岡崎より当国浜松に御入城有て、甲州の持城、当国所々の凶徒を及出し、乱逆静り、三州・当国一統に御手に入ければ、当城築き給ふべきと御上意有て、御先手大須賀五郎左衛門尉に命じ、城地見分として当地に御越有て、此の辺の形勢を見分し給ひ、其の序に松尾山に登りて御覧有る処、扱社要害能城地なれ共、社地と見えて、小社有れば、神職を召出され、宮地の来暦井に此辺の様子逐一に御尋有ければ、神職謹で言上せし趣は、当社は往古、文武天皇の御願望に依る当国に熊野三社を遷し奉るや、其後年暦四百八十余霜過去り、治承年中高倉院の御宇に当て、帝の王子故有て当地に落御有り、幾程なく御薨去ならせ玉ふかゆへに、皇胤なれば逆、御靈影を当社に遷し奉り、民家の氏神と崇め奉る也と委敷相演れば、五郎左衛門殿、此趣を聞こし召され、左もなき小社に見請たれども、文武帝の御祈願と有れば年来久敷古跡成り、殊に又高倉院の王子御靈をこめ奉りしと有れば双方共に备藤略には成りがたし、数百年の社地を破却して城地にせん事恐れ有れば、浄土を撰み、易地して城築より先きに宮殿を建立し、遷座し当城の主護神と勧請すべしと、東西南北の町間を改め給ひ、当城の鬼門に当る小谷田の山を社地として王子権現の境内と定め置れ、所々見分の上、五郎左衛門殿ハ浜松へ御帰城也、頃ハ天正二年甲戌六月上旬より王子権現の作事初め、大工加藤常陸に仰て、首尾成就し、九月九日御遷宮なり。

ここにみえるように、天正二年六月上旬とすれば、高天神城はまだ落ちておらず、そのままに信用できないかもしれないが、天正四年（一五七六）とする史料はいくつかある。その一つ『浜松御在城記』には、天正四年のこととして、「一、大須賀五郎左衛門康高ニ仰セ付ケラレ、横須賀ニ城ヲ御築成サレ、出来。即五郎左衛門與寛助太夫ト入レ置カレ候。横須賀、是ヨリ今ニ御城之有リ候。城近ニヲカサ山ト云所ニ、取手ヲモ構エラルノ由。」という記事がみえ、横須賀城と小笠山砦が築かれたことがわかる。

史料としての信憑性の高いことで定評のある『家忠日記』にも、その天正五年（一五七七）七月三日の条に「よこすか取出場」がみえ、そのころ普請の最中だったことがうかがわれるので、従来の通説である天正六年三月二十一日築城開始説が再検討の余地がありそうである。

天正四年にすでに横須賀に城があつたことは、『武田方史料』にもみえる。『甲陽軍鑑』品第五十三に、

一、天正四年丙子ノ春、遠州高天神の城へ米入らるゝとて、勝頼公きとうぐんへ御馬を出され候。殊ニ高天神の押に家康より横須賀と云所に城をとり、大須賀五郎左衛門と申家老を指置、信玄公の御時十双倍劣たる勝頼公の御備なり。子細は、滝坂より横須賀へ備御押の時、家康におち、しほかひをば叶はずして、浜はたををし給ふ。真田喜兵衛斗はかり兄源太左衛門跡目になり、千余の人数引つれ候て、信玄公御時のごとく、さのみおそれず山の中を押とをる也。

一、右の通り遠州高天神御仕置、勝頼公なされ候に、家康八千余の人数にて、横須賀より少こなたの山に備をたて、合戦をもちて相見えたり。

とみえ、家康が、高天神城の押さへとして横須賀城のほか、横須賀城より高天神寄りの山に備えをたてたことがわかる。これは小笠山砦のことと思われる。この時点では、高天神城の押さへの徳川方の対の城は横須賀城と小笠山砦の

二つだけだったようである。

高天神城に籠城する武田軍と、それを攻める徳川軍との間で、はじめて大がかりな武力衝突があったのは天正六年（一五七八）十月八日のことであった。なお、この戦い、これまでは「高天神軍記」、「改正三河後風土記」などによつて八月八日の戦いとして伝えられてきたが、徳川幕府が編纂した『朝野旧聞哀藁』では、「寛永坂部三十郎広勝譜」・「寛永渥美源五郎勝吉譜」などによつて十月八日のこととし、つぎのように記している。

八日、大須賀五郎左衛門康高、国安河に出張し、高天神城の兵と戦ふ。久世三四郎広宣・渥美源五郎勝吉、鎧を合せ、坂部三十郎広勝一番首を得たり。石川日向守家成及び本多平八郎忠勝・久野三郎左衛門宗能等、左右より攻討によつて、武田勢大に破れ、高天神に走る。諸軍追討て首數級を得たり。本多豊後守広孝・菅沼藤藏定政及び石川家成・本多忠勝・久野宗能等、此事を鑑して浜松に言上す。公御賞美あり。

なお、『朝野旧聞哀藁』はあまりにもあつさりした記述なので、史料的には問題があるが、臨場感ある叙述をしている。『改正三河後風土記』も引用しておこう。さきにも述べたように、同書は戦いのあつた日を八月八日としている。

八月八日に高天神の城兵等、城下国安川辺に出張す。横須賀より先達て押寄、坂部三十郎・近藤武助・柴田三十郎・柘植又十郎・寛助太夫・神谷平六・渥美源五郎等百六十余人、路に伏兵となりて城兵をやり過し、起り立、鉄炮を打かくれば、敵は思ひもよらず驚き騒ぎ、散々に成て逃るを追懸、坂部真先にすすみ高名す。其外追討して五十余人が首を討て、残兵を城に追込。本多平八郎・石川日向守・久野三郎左衛門等此趣を浜松へ注進すれば、大に御感を蒙る。

なお、ここに名前を出てきた渥美源五郎であるが、「首取坂」の地名伝説と、「首取源五」の異名で知られている。「首取坂」については、藤田清五郎氏の『高天神の跡を尋ね』にくわしい。次に引用しておく。

首取坂

天正六年十一月十七日、横須賀城主大須賀康高は武田勝頼が相良に築城の由聞き及んだので渥美源五郎勝吉、福岡五郎八等を斥候に出した。源五郎等は忍び忍び地頭方村より夜半過ぎ佐倉村へさし掛り夜明け方近く、武田方忍びの者徒歩十七人、馬上三騎横須賀へ偵察の帰りの一隊と出合った。物馴れた源五郎は坂の上からは是を見るや否や鎗を捻^{ひね}って大音声を揚げ「福岡太郎八、時分は能いぞ、伏兵^{かくし}を起こせ。伏兵を起こせ。」と叫ぶと、夜明け方で朝霧深く立ち籠めて物の文色^{ぶんしき}も定かに見えないので敵は伏兵ありと許^{ばか}りに驚き、後へ戻つて広場で戦う予定で坂を下りようとした所、源五郎走り込んで馬の太腹を二頭共突き倒し、落ちる騎士を突き伏せ、尚も歩行者四人を突き伏せて首を取った。一騎の武者は馬を飛ばして逃げ去り、その他の者は山中へ駆け込み散々に逃げ去った。源五郎は六つの首を携えて帰り家康に献じて比類なき功名と言われ激賞された。敵兵の死骸は土地の者が坂の東、宮内へ下る所へ埋葬した。この坂は佐倉が池の東三町許りの所で今に首取り坂と称して居る。明治三十五年地主清水氏同所へ源五郎の供養塔を建て、毎年七月二十四日念仏供養を行つて居る。

そのころ、武田方に残った城が遠江では高天神城と小山城の二つだけだったので、その二つの城を結ぶルート上では、このような小競りあいが何度もくりかえされていたものと思われる。

なお、土地の麦搗歌に、

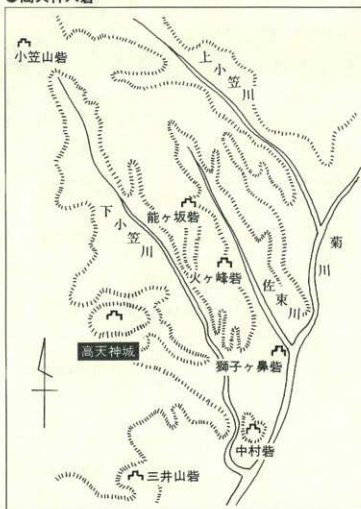
国と天下は上様とらる。渥美源五は首取源五。

兎角^{とぎ}天下は上様とらる。渥美源五は首取源五。

とうたわれたという。

このように、天正七年（一五七九）ごろは、高天神城に籠城する武田勢と、それを攻めようとする徳川勢との間で、

●高天神六砦



城外でたびたび小競りあいがあったが、そうした中にも、家康は着々と高天神城包囲の態勢を整えていった。要するに兵糧攻めである。武田勝頼が運びこむ兵糧、彈薬をストックさせれば、城は自然に落ちると考え、そのためにも、兵糧、彈薬を高天神城に入れないようにする監視所が必要となった。それが、このころ築かれた砦である。

『三河物語』に、

然間、天正八年庚辰の八月より高天神へ取寄給ひて、四方に深く広く堀を掘らせ、高土居を築き、高塀をかけ、

同塀には付もがりを結び、堀向には七重八重に大柵を付させ、一間に侍一人づつの御手当を成され、切つても出ば、其上に人を増し給ふ御手立を成されケレバ、城中よりは鳥も通わぬ計なり。

とみえる。

よく、「蟻の子一匹通しはしない」などというが、一間(約一・八メートル)に一人の番兵がいたので、まさに「人間の鎖」で、城外から城内への兵糧・彈薬の運搬は不可能だったであろう。

●高天神城を囲む諸砦

「注」 巡將 主將 成瀬吉右衛門正一
副將 日下部兵右衛門定好
(鈴木東洋「高天神城を囲む城砦群」『古城』12号による。) ※6砦に入る砦

名 称	所在地	形式	築城年代	遺 構	文 献	備 考	所要 日数
※ 獅子鼻砦	小笠町 大石	丘山城	天正7年 (三河物語) 天正8年6月 (家忠日記)	曲輪 堀切り	家忠日記 三河物語 高天神記 武徳編年集成	大須賀康高持 松平家忠普請	7日
※ 中村ノ砦	大東町中	丘山城	天正7年 (三河物語) 天正8年3月 (家忠日記)	曲輪 堀切り	家忠日記 三河物語 高天神記 武徳編年集成	大須賀康高持 松平家忠普請 城山、雑賀砦 両者を中村砦	6日
※ 能ヶ坂砦	大東町 小貫	山城	天正7年 (三河物語) 天正8年 (高天神記)		三河物語 高天神記 武徳編年集成	本多豊後守持	
※ 小笠山砦	大東町 入山瀬	山城	永祿11年	曲輪 堀切り	三河物語 高天神記 武徳編年集成 掛川誌稿	石川日向守持	
風吹峠砦	大東町 入山瀬	山城	天正6年 (日記) 天正7年 (明鑑)		家忠日記 横須賀根元歴 代明鑑	石川日向守持	
毛森山砦	大東町 毛森	丘山城		全く消滅			
※ 火ヶ嶺砦	大東町下 土方、毛 森中方境 界	山城	天正8年	曲輪	三河物語 高天神記 武徳編年集成	大須賀康高持	
※ 三井山砦	大東町 大坂三井	山城	天正7年 (三河物語 高天神記) 天正8年 (家忠日記) 天正7年築城 天正8年修補 (武徳編年集成)	曲輪堀	家忠日記 三河物語 高天神記 武徳編年集成	酒井与四郎重 忠持 松平家忠普請	15日 乃至 18日
安威砦	大東町 下土方丸 ノ内		天正8年		横須賀根元歴 代明鑑		
高天神城きわの陣 橋ヶ谷の陣 萩原口の陣			自天正8年10月 至天正9年2月		家忠日記 三河日記		64日

●「家忠日記」にみえる高天神城とその周辺の状況

天正六年	11月2日	家康・信康、馬伏塚へ御陣ニ取候。
	3日	敵勝頼よこすかの城むかい迄勤候。家康同惣人数よこすか城きわニ備候。敵高天神迄引取候。
	4日	敵物見よこすかへ勤候。此方人数も□□家康は小笠へ越され候。
	8日	風吹江三日番ニ。
	10日	風吹江番ニ越候。
	12日	敵高天神ノ引候。
	14日	風吹より懸河・益田迄越候。
	晦日	敵勝頼廿五日ニ引候由にて、各浜松迄引候。
天正七年	11月12日	家康馬伏塚へ御越候。
	13日	各国衆よこすか迄陣替候。
	26日	敵高天神へ移候由御注進候。
天正八年	3月13日	高天神之御取出候由候。
	18日	大坂取出場迄越候。
	20日	大坂堀、取出普請候。
	21日	同普請候。
	22日	同普請候。
	23日	同普請候。
	24日	同普請候。家康より肴給候。
	25日	相坂取出しかけ候て、中村取出へ越候。普請候。
	26日	同普請候。
	27日	同普請候。
	28日	中村普請出来候。
	29日	相坂中村之中ニ取出候而普請候。
	壬3月1日	相坂田中手分にて普請候。
	2日	又相坂普請候。
	3日	同普請候。家康より樽給候。
	7日	又堀普請候。
	6月10日	家康はよこすか迄御出陣候。
	11日	高天神取出場し、かはな陣取候。
	12日	取出普請候。
	13日	同普請候。
	14日	同普請候。家康よりさかな給候。
	15日	同普請候。
	16日	同普請候。家康よりふり給候。
	17日	取出普請出来候つ。高天神福小屋勤候て、家中ニも二人手負候。
	25日	家康小性衆、浜松ニ而大すか弥吉高天神之勤ニ御法度に背き候とて、腹を御切せ候。
	10月19日	大坂すかニ陣取候。
	20日	さくの木切候。
	21日	同さくの木切候。

天正八年	22日	高天神城きわ二陣をよせ候。
	24日	堀きり普請候。
	25日	へい普請候。
	26日	さく付候。
	28日	家康は馬伏塚へ馬を入れられ候。
	11月 1日	へい普請候。
	6日	堀普請候。
	8日	堀普請候。
	9日	同普請候。
	10日	同普請候。
	11日	堀普請候。
	12日	たち花かや普請候。
	13日	堀普請候。
	14日	同普請候。
	15日	同普請候。
	17日	同堀普請候。
	18日	同普請候。
	19日	同堀普請候。
	20日	同普請候。
	21日	同普請候。
	22日	同普請候。
	23日	同普請候。
	24日	同普請候。
	25日	同普請候。
	26日	同普請候。
	27日	同普請候。
	28日	同普請候。
	29日	同普請候。
	晦日	同普請候。

家康方によって築かれた砦は、かなり以前からあった小笠山砦と、天正七、八年をピークに築かれた獅子ヶ鼻砦・中村砦・能ヶ坂砦・火ヶ嶺砦・三井山砦の五つがあり、合わせて「高天神六砦」として有名である。

その詳細については94ページの表をみていただくと、93ページの地図からも明らかなように、全体として高天神城を包囲する配置になっていた。

特に天正八年（一五八〇）は、家康の家臣たちは、重臣クラスまでこのときの砦作りに動員されていた。松平家忠の『家忠日記』から、天正六年～八年十一月末日にかけての砦普請にかかわる記事をひろい出ただけでも95ページからの表のごとくなり、そのころの徳川家臣団にとって、これが一番大きな仕事であっ

たことがうかがえる。

天正九年三月二十二日の決戦

兵糧や彈藥の搬入を遮断された高天神城の城兵たちにとって、一縷の望みは、勝頼が後詰にきてくれることだけであつた。その日のくることを念じて籠城戦を戦つていたといつても過言ではなかつた。城番岡部長教は、天正八年（一五八〇）夏ごろから甲府の武田勝頼に後詰にきてくれるよう要請していた。ところが、同じ高天神城内にいながら、軍監横田尹松からは、「後詰にくる必要はない」という連絡が勝頼のもとに届けられていたのである。明らかに、城内で意見の不一致があつたことがわかる。仮に、城番岡部長教と軍監横田尹松の二人が一致して後詰を要請していれば、勝頼も高天神城を見捨てるようなことはなかつたにちがいない。

では、横田尹松は、なぜ、「後詰の必要はない」といつていたのだろうか。『甲陽軍鑑』品第五十五に、このときの尹松のいい分が載っている。すなわち、

一、天正八年秋の末に、高天神御番手侍大將一騎合の衆各ふち米渡しの高野まで連判仕り、甲州へ書付を進上申。其子細は、信長・家康次第に手づよく罷成、城を渡すべきと申ても、城をば請取、番手の者共をば堅固に返し申すまじく候。さ候はゞ東美濃岩村の城にさしをかれたる秋山伯耆守・座光寺などごとくに、だしぬき仕るべく候間、勝頼公後詰をなされ番手の人数を御引取候様にと申上る。横田甚五郎ばかり別各に飛脚を進上申。其趣は御屋形御旗を出され、後詰の儀必御無用になさるべく候。其子細は御馬を出され、此城をいつものごとく御抱にて候へば、尤に候へ共、御屋形後詰にても番手の衆銘々を堅固に引取なさる、斗にて、此城をば定而御捨あるべく候。其儀な

れば勝頼公御馬出されたるかひはなく候。

というもので、要するに、「こうなってしまった以上、勝頼殿がこの城に後詰にきても、城兵を救うことはできない」といういい方をしていたことがわかる。「もはや、高天神城は捨てた方がよい」というのである。

『甲陽軍鑑』のその続きをみていくと、品第五十六のところに、天正八年の九月、甲府で、勝頼が重臣たちを集め、高天神城をどうするかについての軍評定が開かれたことが記されている。そこで、長坂長閑、跡部大炊助ら勝頼の龍臣が、横田尹松の意見を採用し、後詰の兵を送らないことに決したことがみえる。つまり、高天神城は武田勝頼によつて見捨てられてしまったのである。

それでも、見捨てられたとは知らない岡部長教ら龍城衆は、必死の龍城を続けていたが、何度要請しても何の音沙汰がないため、とうとう独自の動きをとることになった。その事實は、これまでの高天神城の研究では特に取りあげられてこなかった点であり、信長発給の文書から明らかになってきた新事実なので、ここでくわしくみていくことにしたい。

その信長発給文書というのは、天正九年（一五八一）と推定される正月二十五日付の水野宗兵衛忠重宛信長朱印状（水野文書『織田信長文書の研究』下巻）である。まず、全文掲げておく。

〔信長上巻〕
「高天神の時」

信長様の御書 宅通

切々の注進状、情（情）を入れらるゝの段、別して祝着に候。其に付きて、城中一段と迷惑の躰、矢文を以つて懇望の間、近々候か。然らば、命を助くるに於ては、最前に滝坂を相副え、只今は小山をそへ、高天神とも三ヶ所を渡すべきの由、是を以つて慥意（意）の心中を推量せしめ候。抑も三城を請取り、遠州内を残る所なく申し付け、外聞実儀然るべ

く候か。但し見及び聞き候林に、以来は小山を始め取懸け候とも、武田四郎分際にては、重ねても後卷なるまじく候や。其れを以つて両城をも渡すべきと申す所毛頭疑いなく候。其節は家康氣遣い、諸卒辛勞すべき処、歎かわしく候とも、信長一兩年内に駿・甲へ出勢すべく候条、切所を越し、長々數弓矢を取るべき事、外聞口惜く候。所詮、後卷と号し、敵彼の境目へ打出で候は、手間入らず実否を付くべく候。然る時は、兩國を手間入らずに申し付け候。自然後卷を構えず、高天神同前に、小山・滝坂を見捨て候へば其響きを以つて駿州の禍の小城押えの事不實に候。以来氣遣い候とも、只今苦勞候とも、両条のつもりは分別を弁じ難く候間、此の通りを家康に物語り、家中の家老ども等も申し聞かせて談合尤に候。これは信長思い寄る心底を残らず申し送る者也。

正月廿五日

信長（朱印）

水野宗兵衛殿

この文書は、信長の文書にしては珍らしく長文である。それだけに内容豊富であり、この時期の高天神城の動きをみていく上で一級史料といつてよい。

まず、注目される一点は、天正九年正月二十五日以前に、「降服したい」という矢文が籠城している武田勢から徳川勢に打ちこまれたという事実である。降服条件は、「城兵の命を助けてくれるなら、高天神・小山・滝坂の三つの城を開城する」というものであった。滝坂は正しくは滝堺城のことである。籠城するにはしたが、いつまでたつても勝頼の後詰がなく、また、勝頼との連絡も思うようにとれなかったのであろう。勝頼の思惑とは別に、籠城している岡部長教らの独自の判断でこうした申し入れが家康側になされたものと思われる。

そして、信長朱印状でもう一つ注目されるのは、そのころの家康・信長側の対勝頼認識がよくわかるという点である。少なくとも信長は、「勝頼は遠江には後詰にこれないのではないか」と分析していたことがわかる。遠江に後詰

にこれなければ、駿河における武田方の部将たちも次第に武田氏を見限るだろうとみていた。事実、そのことはその後の歴史展開によって実証されたわけであるが、天正九年の正月の時点ですべて見通していたわけで、「さすが信長」といわざるをえない。

もう一点注目されるのは、高天神城兵の降服の申し出に対する対応を、家康の重臣たちの軍議による判断にゆだねたという点である。遠江はあくまで家康の所領であり、信長は家康の所領のことは家康の判断を優先させていたことがこれによってわかる。

それにしても、天正九年正月二十五日以前、高天神城の籠城兵から「降服したい」という申し出が矢文を使ってなされていたことは特筆されてよい。

結局、家康は、「降服したい」という籠城兵側の申し出を許可しなかった。そのまま兵糧攻めを続ければ高天神城を落とすことができるという自信があったからであり、万一、勝頼が後詰に出てきたとしても、そのときは信長と一緒に勝頼の息の根をとめることができて好都合であると考えていたからである。

高天神城ではいよいよ兵糧がつきてきた。勝頼の後詰の動きは全くない。そこで、岡部長教は、天正九年三月二十二日、血路を開くため、城内から討って出る作戦をたて、それを実行に移した。三月二十二日の戦いの模様について『浜松御在城記』は簡潔につきのように記している。

天正九年^{辛巳}

一、旧冬ヨリ、高天神ノ城ヲ日夜御攻成サレ候。城兵ハ勝頼へ後詰ヲ願候得共、次第々ニ甲州衰、勝頼後詰罷リ成ラズ候。城中抱へ難キニ付テ、三月廿二日、落去申候。

甲陽軍鑑ニハ、横田甚五郎申越旨ヲ以、後詰之無シト御座候得共、実ハ衰微、後詰罷リ成ラズ候也。

高天神ニハ、駿河先方岡部丹波守ヲ大將ト爲シ、栗田・孕石主水・山形・婿ノ相木、其外駿州・上野・信州ノ小侍共桶籠、江間右馬允・横田甚五郎、目付トシテ入レ置キ申シ候。

此時、信長公ヨリノ御加勢、佐々内藏助・野々村三十郎。

御末方石川手并足助衆、持口ハ入江ノ様ナル所ナレバ、城ヨリ、是ヲ弱シト見テ、切テ出ルヲ、堀ヘ追入、三方ヨリ挟ミ討取。死人堀ニ充滿。首百三十。其外相殘諸手人六百、都合七百三十討取。信長ヘ遣ワサレ候。大久保七郎右衛門持口林ノ谷ヨリ、横田甚五郎逃行。御末方ノ指物ヲ拾得、横田逃出候由、袖中集ニ見タリ。

小幡勘兵衛モ、此時籠候テ、落行候故、大久保彦右衛門ト咄御座候様ニ申シ伝候。

岡部丹波ヲバ、大久保平助太刀打、七郎右衛門家来本多主水ニ首ヲ取セ申候所ニ、其首、谷ヘ取落。翌朝、夜明テ取上候ヲ、鶴殿石見、今川家ニテ傍輩故、丹波カ首ト能見知候テ申シ付ケ、俄ニ土ヲ洗、三方ニ居テ、実檢ニ入レ候由。

此御陣中ヘ、幸若與三太夫ヲ召シ連レラレ候。城中ニテ之ヲ聞キ、舞一節所望仕リ候ニ付、權現様聞シ召サレ、與三太夫ヲ召シ出サレ、義有テ末哀ナル舞ヲ一番仕候様ニト仰セ付ケラレ候。與三太夫、則チ高館ヲ一番舞申シ候由。城兵モ、堀ノ際迄出デ、之ヲ聞ク。栗田刑部ハ、堀ノ走り矢倉ニ上リテ聽聞。舞終テ赤根ノ羽織着タル武者一騎、城内ヨリ出テ、其比閨東ニテ用申候佐竹大々ホウト云紙十帖厚板ノ織物添テ、幸若與三太夫ニ引出物仕リ候。其酉ノ羽織着タル者、翌日討死仕リ候。栗田ハ家ニ火ヲ掛ケ、焼死仕リ候由。與三太夫子幸若忠四郎物語ノ由、伝ヘ承リ候。

とにかく、このほか『武徳編年集成』や、戦いに参加した徳川方部將たちの家譜類をみても、実に壮絶な戦いだったことがわかる。死者七三〇余、死者で堀が埋まったということからもうかがわれるように、すさまじい戦いだった

ことはまちがいない。

落城後の高天神城

落城後、というより、落城に際してであるが、高天神城の内外で、いくつかのドラマが展開されていた。一つは、軍監横田尹松の高天神城脱出劇である。さきに引用した『浜松御在城記』にも記されていたように、横田尹松は、三月二十二日の落城のとき、徳川方の旗を拾って、まんまと徳川方の目をごまかし、城の脱出に成功している。

このとき、尹松は、犬戻り・猿戻りとよばれた隘路おろちを通して逃げたことから、以後、そこは「甚五郎抜け道」とよばれるようになったという。ふつうは、『高天神軍記』その他によつて、大久保忠世と大須賀康政の陣の間にある柵を破つて脱出したとされているが、これには異説もあつて、『朝野旧聞哀藁』に収められている「内藤家譜」によると、大久保忠世と榊原康政隊の間の柵を破つたとしている。

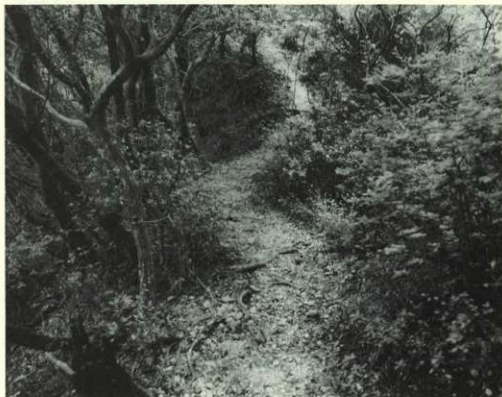
また、『前橋酒井家旧蔵聞書』には、

……横田甚五郎、遠州高天神ヲ退時二足二踏抜ヲ致セリトテ、城外ニ居テ、事鎮リテ寄手之方へ通りケレバ、皆人手負テ退ク味方ゾト心得テ通シケリト也。

という興味深いエピソードも記されている。

いずれにしても、脱出に成功した横田尹松は甲府にもどり、武田勝頼に拝謁し、勝頼から「よく逃げ帰った」とほめられ、太刀を褒美として与えられたが、尹松はそれを辞退している。

その後、勝頼のもとにいたが、翌天正十年（一五八二）三月、武田氏が滅亡してしまったので、家康についた。家



▲大戻り・猿戻り

康も、あれだけ自分を苦しめた横田尹松の前歴を承知の上で家臣の列に加えているのである。家康のもとで三〇〇〇石を与えられ、御使番などをつとめ、小牧・長久手の戦い、小田原征伐、そして関ヶ原の戦い、大坂の陣と、その後の家康の主な戦いに従軍し戦功をあげている。没したのは何と寛永十二年（一六三五）七月五日で、享年八十二歳であった。

もう一つのドラマは、城内の石牢（石窟）から、大河内源三郎が救出されたことである。大河内源三郎は名を正局（まうきょう）といって、先の天正二年（一五七四）の戦いの際、城主小笠原長忠の去就に不安をもった家康が、軍目付（いくさめづけ）として高天神城に送りこんでいた家康直属の家臣であった。そのため、武田方に降った小笠原長忠によつて捕らえられ、石牢に入れられたままに置かれていたものである。

家康は、七年間も節をまげなかった正局の忠節を賞し、その後、好遇している。

なお、大久保忠世の家臣三倉忠右衛門定次が、孕（はら）



▲大河内正局が幽閉されていた石窟

石主水佑元^{いししゅすけ}泰を生け捕りにしてきた。この孕石元泰は、今川氏の時代、義元の重臣の一人で、義元から「元」の一字を偏諱として与えられていたほどであった。今川氏の滅亡後、武田氏に仕え、高天神城の戦いのとき籠城していた者である。

家康は、この孕石主水には恨みがあつた。というのは、家康が八歳から十九歳まで、十二年間駿府に抑留されていたとき、その屋敷が孕石主水邸と隣りあわせだったからである。家康は、孕石主水から人質として冷たい視線をあげせられ、ことあるたびに「三河の忤にあき果てたり」といわれ、屈辱の日々を送ったにがい思い出があつたのである。家康は即座に孕石主水に切腹を命じている。

さて、戦いのあつた翌二十三日、首実検が行われた。首についた泥などを洗い落とし、生け捕られた者が、「これは誰々の首」というのを首帳に記し、その首を誰が取ったのかもメモされた。生け捕られた者の証言によって判明した首は左記の通りである。

ここでは『武徳編年集成』から引いておく。

岡部丹波守	三浦右近	同	雅楽助	森川備前守	孕石和泉守	朝比奈弥六	近藤与兵衛
油比嘉兵衛	同	藤太夫	岡部帶刀	松尾若狭守	名郷源太	武藤刑部	六笠彦三郎
安西平右衛門	同	八郎兵衛	栗田鶴寿丸	同	刑部	同彦兵衛	同
榊木庄左衛門	山上備後守	利根川雅楽	水島備中守	大戸丹後守	土浦野右衛門	土橋五郎兵衛	
福島木工助	依田美濃守	同木工左衛門	同	武兵衛	河上三藏	江戸主税助	江馬右馬允直盛

これらを含め、七三〇余の首が家康の首実検に供されたわけであるが、このときの首実検のこととして興味深いエピソードがある。「大ニ川志」に、

戸田忠次ノ隊ヘ得ル所ノ首級一ツ尊覧ニ供スルヨリ外他人ヘ見セシムル事有ル可カラズトテ、佐々、野々村力実（同）換ノ時ニ臨テ敢テ其首級ヲ出サズ。其首級ハ年十六七ニテ、白粉ヲ粧ヒ、齒ニ鉄醬ヲ附ケ、緑髪丈ケナルヲ結テ、男女分チ難シ。生捕ノ者ヲ呼ビ、是ヲ糺スニ知ル者ナシ。尊覧ニ共シケレバ、神祖ノ曰、其眼ヲ開キ見ルベシ、瞳子ヲ上ニ見返シ、睡ノ中ヘ入り、白眼ノミナラバ女ナリ。瞳子分明ニ見ユレバ、男子ナリト。因テ是ヲ見ルニ、瞳子分明ニ見ユル故男子ト極ム。此首後ニ知ル者有テ、栗田刑部が小姓時田某ト云ヘル者ナリト云ヘリ。

と記されているもので、化粧をし、お歯黒をつけた首があり、男の首か女の首か判断に迷ったというものである。結局、武田方の部将栗田刑部の小姓の首とわかったわけであるが、籠城戦においても、当時はこのような寵童がいたことがうかがわれる。

なお、城内に女性はいたのか、いたとしたら落城のときどうしたのか。残念ながらこれらのことについては史料的に明らかではない。

第七章 遺構からみた高天神城

城の位置と地勢

高天神城は、標高一三二メートルの鶴翁山を中心に、放射状にのびるいくつかの尾根を巧みに使った城である。麓からの高さ、すなわち比高はおよそ一〇四メートルほどである。

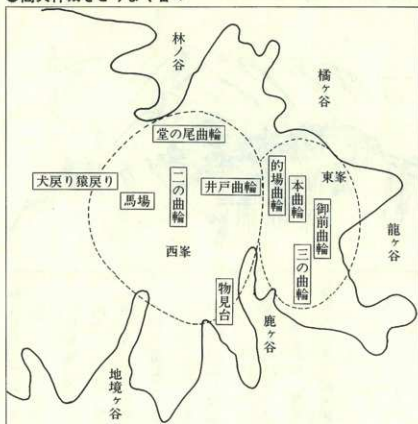
城の分類法として、山城・平山城・平城がよく知られているが、ふつう、比高一〇〇メートル以上の城をこの分類法では山城とよんでいるので、高天神城は山城の範疇に入る。

さて、城は、小笠郡のほぼ中央、大東町土方に位置し、ちょうど、小笠山山塊の東南にのびた尾根の末端部にあたり、平野部を見渡す絶好の場所であった。ここに城が築かれることになった理由の一つは、この見晴らしのよきであろう。

そして、もう一つの理由は、鶴翁山とその周辺の地勢である。「放射状にのびるいくつかの尾根」と表現したが、これが高天神城の特徴といってよい。尾根が、ちょうどやつでの葉のように入り組んでおり、谷が入りこむ形になっていた。複雑な地勢は、防御を主体とする山城の場合、不可欠な条件でもあったのである。しかも、その周囲には、小笠川などの中小河川が流れ、天然の堀を形成しており、守るに守りやすく、攻めるに攻めにくい城ができあがっていた。

小さな尾根が櫛の歯のように出っばっている形は、軍学者のいう「横矢掛り」にうってつけの地勢であった。城を攻める場合、攻める側は、急な断崖のようになっていいる斜面をそのまま攻めのはることはできず、いきおい、谷の奥に進み、そこから比較的ゆるやかな斜面のところをみつめて、そこにとりついて攻めのはることになるが、高天神城

●高天神城をとりまく谷々



の場合、さきにみたように、やつでの葉のように尾根がのび、その間に谷が入りこむ形となっていたので、尾根に築かれた曲輪にはさまれた格好になる。つまり、両サイドから矢とか鉄砲の攻撃をもちにうけたわけである。高天神城が「難攻不落の名城」とうたわれた理由の一つがこれであった。

そしてもう一つ、地勢の点で注目されるのは、高天神城の築かれた鶴翁山が、完全に独立した山ではなかったという点である。独立はイコール孤立であり、仮に、独立した山城であったならば、完全に周囲を包囲されてしまい、簡単に落とされてしまう。しかし、高天神城の場合は、後述する「犬戻り・猿戻り」によって、小笠山山塊につながっていたのである。攻める側は、高天神城を包囲しても、完全に包囲することが困難であった。これも高天神城が「難攻不落の名城」とうたわれた要因であった。

なお、高天神城の場合、もう一つ注目される点があった。それは、高天神城が「一城別郭^{いちじょうべつかく}」の構えをしていたという点である。「一城別郭」といってもあまり一般的な用語ではないので、若干

●高天神城跡推定鳥瞰図（原図 見崎関雄）



解説を加えておこう。『日本城郭辞典』には、つぎのように説明されている。

一城別郭^{べいちじく}べいちじく この場合は、城とは城全体を、郭とはその内部区画をいう。城の防禦力を増大するために、一つの城の中に幾つもの区画を設けることをいう。一郭では、一箇所から敵が侵入した場合、直ちに陥落してしまう。そこで一つの城に縦横に区画を設け、万一、一つの部分がやぶれたとしても、他の部分は健在であるように工夫されていなければならないということである。

もっとわかりやすくいえば、二つの城で一つの城にしたといつてよい。高天神城の場合、「一城別郭」の典型的な例で、東峯の部分だけでも一つの城であり、西峯の部分だけでも一つの城である。その二つの城から成りながら、高天神城という一つの城になっていた。

東峯の遺構

御前曲輪

東峯の一番高いところに位置するのが御前曲輪である。広さは、東西が約一五メートル、南北が約四五メートルほどで、上・下二段になっており、上段と下段の段差は約二メートルある。上段にはかつて高天神社が祀られていた。現在、高天神社は西峯の後述する二の曲輪（西曲輪）に移っているが、もとはここにあった。御前曲輪の名称もそれからきている。

御前曲輪の西側に、現在、基底部の幅が三・五メートルほどある土塁が残っている。往時はもう少し高さもあり、全体を囲んでいたものと思われる。

本曲輪（千疊敷・本丸）

ふつう本丸といわれているが、戦国期の城では本丸といういい方はせず、本曲輪ないし一の曲輪である。御前曲輪の北に続く曲輪で、御前曲輪より一段、約三メートルほど低いが、この曲輪が名前の通り、この城の中心であった。小笠原氏の時代、城主小笠原長忠がいたのもこの曲輪である。

現在、御前曲輪から北東へ、化石で有名な岩場のところを通じて本曲輪に入る道があるが、往時はここは土塁によって区画され、本曲輪へ直行することはできなかった。

本曲輪の広さは東西が約二四メートル、南北が約五〇メートルで、西側には、低くなってしまっているが、土塁が現存する。北隅の虎口こぐちは典型的な喰い違い虎口の形状を残している。そして西の場的曲輪に通ずる。

的場曲輪

的場曲輪というからには、的場、すなわち弓射場があったものと思われるが、残念ながらその遺構はなく、したがって、厳密には曲輪の名称の由来は不明である。

この曲輪は、上の本曲輪を守るための腰曲輪の一つで、規模もそう大きくはなく、東西約九メートル、南北約二七メートルである。

木戸



▲的場曲輪址



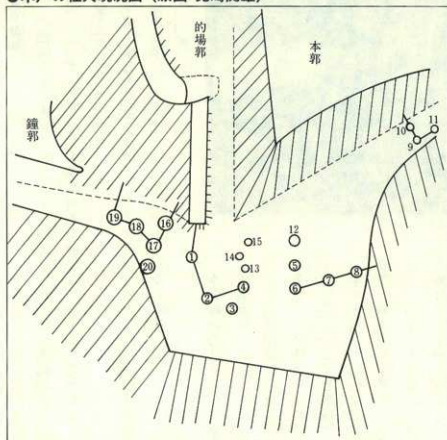
▲的場曲輪下の木戸推定地

最近、柱穴状の遺構があることが明らかになった。略図を作成すると左図のごとくなるが、どうやらここに門と櫓があったようである。当時、こうした門を木戸（城戸とも書く）とよんでいるので、ここでは、そのように理解しておきたい。

三の曲輪（与左衛門平）

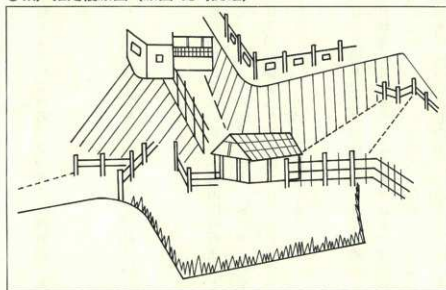
御前曲輪の東南にあたり、大手道を監視する位置にあり、また、東および南方面の見晴しがきく。小笠原氏の時代、城主長忠の一族小笠原与

●木戸の柱穴現況図（原図 見崎開雄）



左衛門が守っていたところから、別名を与左衛門平という。東西約四〇メートル、南北約二〇メートルとかなり広く、周囲に土塁がよく残っている。

●城戸推定復原図（原図 見崎開雄）



伊賀曲輪

三の曲輪のすぐ南に一〇メートル四方ぐらいの狭い曲輪があり、伊賀曲輪とよばれている。そのすぐ南西斜面を大手道が通っているので、大手番所的な曲輪だったものと思われる。

大手池の段 (池曲輪)

伊賀曲輪と大手道をはさんでちょうど反対側に二段、曲輪状の遺構があり、池の段とか池曲輪の名でよばれている。名称の由来は、そのすぐ下に蓮池があったからである。

石 窟 (石牢・石風呂・石室)



▲三日月井戸

本曲輪のちょうど下、東北側斜面に石窟がある。世に「大河内の石窟」として名高い。さきにもふれたように、天正二年の開城のとき、家康方の軍監として高天神城にいた大河内源三郎正局が捕えられ、幽閉されていたところである。江戸時代の史料には「石室」とか「石風呂」と出てくる。

三日月井戸 (三日月堀)

東峯と西峯の間の鞍部を搦手口に少し降りたところに三日月井戸がある。溜井の形が彎曲してちょうど三日月状をしているからこの名があるわけであるが、わざと人工的に三日月状にしたのではなく、地形的に彎曲したところの地層から水がしみ出し、それを溜めて飲料水にしたものである。

西峯の遺構

井戸曲輪

東峯と西峯の鞍部の西峯の部分、東西約七〇メートル、南北約一三メートルの曲輪があり、その曲輪の西隅に大きな井戸があることからこれを井戸曲輪の名でよんでいる。山城にあつては、特に籠城のときには飲料水の確保は絶対不可欠なことであつた。

二の曲輪（西曲輪・丹波曲輪）

井戸曲輪の西、階段をあがつた一帯、現在、高天神社の建つ一帯が二の曲輪である。西峯の本曲輪にあたる部分で、西曲輪ともよばれ、また、天正七



▲井戸曲輪址

年（一五七九）以降、岡部丹波守が守っていたことから丹波曲輪の別名でも知られている。

現在、社殿の建つ部分は東西約二〇メートル、南北二三メートルほどと狭いが、その北側に一段下がって東西約三五メートル、南北約一二メートルの腰曲輪状の遺構があり、それも二の曲輪に含んで考えている。

堂の尾曲輪（塔の尾曲輪）

二の曲輪の北側の尾根の上に突き出たように築かれた曲輪が堂の尾曲輪である。これも名前の由来がよくわからない曲輪であるが、別名の塔の尾曲輪が本来の名前とすれば、物見の塔、すなわち物見櫓があつたためにこの名称が生まれたものとも考えられる。「セイロウ曲輪」と同じかもしれない。「セイロウ」は井樓で、高櫓のことをさしている

からである。

堂の尾曲輪は空堀によって大きく三つの部分に仕切られた連郭式となっており、東西幅は一〇メートルぐらい、広いところで二〇メートルぐらいであり、南北は三つあわせて約一〇〇メートルほどである。

馬場

二の曲輪の南西方向、大堀切をはさんで馬場があった。もっとも、名称は馬場であるが、馬を訓練する本来の馬場とすると狭すぎるし、また、山城のこのように高いところに馬場があったとも思えない。この馬場の続きが後述する大戻り・猿戻りで場外に続いていくので、私は、「番場」が転訛したのではないかと考えている。



▲空堀



▲切割

大戻り・猿戻り (甚五郎拔道)

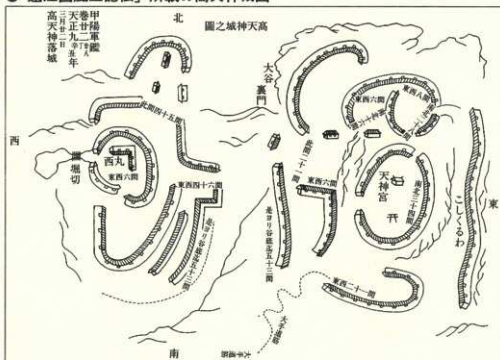
馬場からさらに西へ馬の背状の尾根道があり、これを大戻り・猿戻りの険とよんでいる。あまりのけわしさに、犬や猿も途中から引き返したという場所である。天正九年三月二十二日の落城のとき、横田甚五郎尹松がここを通過して脱出したという。そのため「甚五郎拔道」の名もある。

物見台

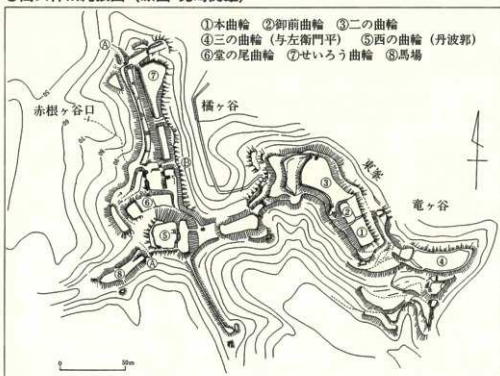
二の曲輪の東南の方角に、出丸的

な部分があり、物見台とよばれている。堀切もあり、三段ほどの塁段からなっている。これは、鹿ヶ谷に入りこんでくる敵を扼するものであったと考えられる。

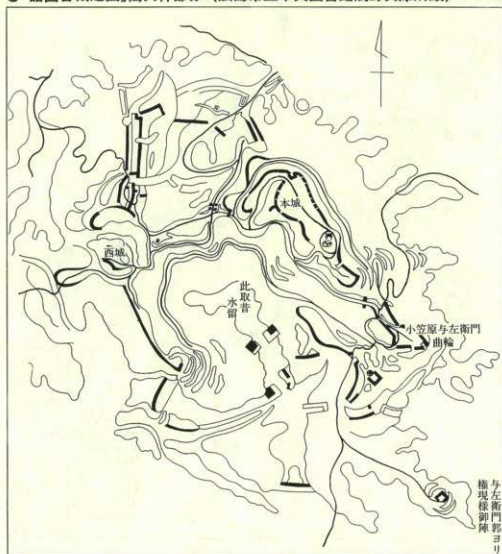
●「遠江国風土記伝」所載の高天神城図



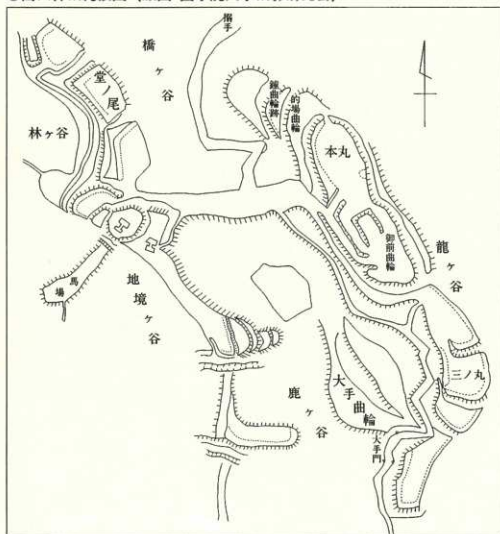
●高天神城縄張図（原図 見崎関雄）



●「諸国古城之図」高天神部分（広島市立中央図書館浅野文庫所蔵）



●高天神城縄張図（原図 国学院大学城郭研究会）



高天神山城

静岡県小笠郡城東村上土方

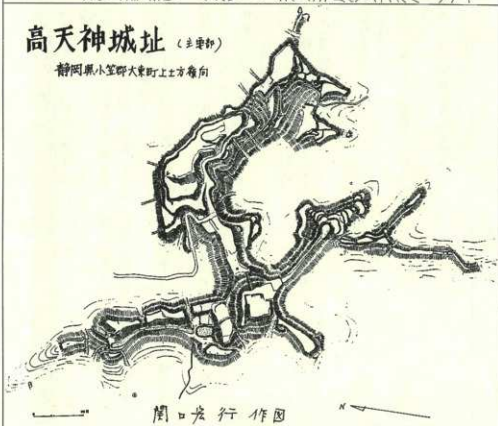
附73.3.4

作図水田 昇



高天神城址 (主要部)

静岡県小笠郡大東町上土方南向



関口英行作図

〈高天神城関係年表〉

年号	西暦	事 項 (特記事項には出典を付した)
永正10	一五二三	これより以前、福島助左衛門尉助春、高天神城に入る (大福寺文書)
大永元	一五二一	10・23 福島氏、甲斐上条河原で討死 (妙法寺記)。
天文5	一五三六	この年 小笠原春義 (春儀・春茂)、高天神城主となる (寛政重修諸家譜、ただし、実際は天文五年以降か)。
11	一五四二	6・10 花倉の乱で、玄広恵探派の福島氏没落。小笠原春義 (春儀・春茂) が高天神城に入るのはこのあとか。
13	一五四四	10・26 小笠原春茂、華厳院に寄進状を出す (華厳院文書)。
	7・1	小笠原氏興 (氏清)、華厳院に寄進状を出す (華厳院文書、このころ高天神城主は春茂から氏興に交替か)。
永禄3	一五六〇	5・19 桶狭間の戦いで今川義元、織田信長に討たれる。従軍していた小笠原氏興は高天神城に敗走する。
7	一五六四	この年 小笠原長忠 (信興)、氏興のあとをついで城主となる (高天神軍記)。
8	一五六五	8月 家康、小笠原長忠を味方に誘う (田原近郷聞書)。
11	一五六八	12月 家康、小笠原長忠を味方に誘う (浜松御在城記)。
12	一五六九	12・13 武田信玄、今川氏真を駿府今川館に攻める。家康も遠江に侵入。
	1月・5月	家康、今川氏真が逃げこんだ掛川城を攻める。小笠原長忠もこれに従軍する。
元亀元	一五七〇	6・11 小笠原氏興没し、子長忠城主となる (寛政重修諸家譜)。
	11・5	信玄、駿河攻略のため甲斐を出陣。
	1月下旬	信玄、駿河へ進攻し、花沢城を攻略する。
	5・14	信玄、北条氏政・今川氏真と駿河吉原で戦う。
	6・28	姉川の戦い。小笠原長忠、徳川軍の第二陣として戦功をあげる。
	10月	信玄の臣山県昌景、遠江をうかがう。
	3・5	信玄、塩賀坂に陣を張り、内藤昌豊を高天神城を攻めさせる。
2	一五七一	4・19 信玄、三河足助城などを落とし、甲斐に兵を引く。

3	1572	10・3	信玄、甲斐を出発。
天正元	1573	10月中旬	遠江に入った信玄、只来城、飯田城などを落とし、二俣城を攻める。
2	1574	12・22	三方ヶ原の戦いで、家康は信玄に大敗する。
		4・12	信玄、信濃の駒場で没す。
		5・22	家康、匂坂牛之助の戦功を賞す（浅羽本系図所収文書）。
		5・28	武田勝頼に攻められた高天神城は本曲輪・二の曲輪・三の曲輪を残すのみ（真田文書）。
		6・10	堂の尾曲輪も落ちる（武州文書）。
		6・14	信長、後詰のため、岐阜城を出発する（信長公記）。
		6・17	信長、三河吉田城に到着する（信長公記）。この日、高天神城閉城。
		6・25	勝頼、高天神城に山県昌景を入れようとする（甲斐稲葉文書）。
		8・1	家康、馬伏塚城を築き、大須賀康高を入れる。
		この年	城番として横田尹松が高天神城に入る。
3	1575	5・21	長篠の戦いで勝頼、信長、家康連合軍に敗れる。
		10・23	小笠原長忠の高天神関係の最終文書（村松文書）。このころ、長忠は高天神城を出るか。
4	1576	この年	家康、高天神城の対の城として横須賀城を築く（浜松御在城記）。
5	1577	2・9	岡部丹波守長教（元信・真幸・長保）、勝頼から遠江勝岡田周辺において一五〇〇貫余を与えられる（土佐国蘆簡集残篇所収文書）。
6	1578	10・8	高天神龍城の武田軍、国安川辺で徳川軍と戦う（朝野田聞哀藁）。
7	1579	6・14	勝頼より岡部長教に、高天神城の番替を指示（土佐国蘆簡集残篇所収文書）。
		8月	岡部長教、高天神城に入り城番となる（甲陽軍鑑伝解）。
		夏	岡部長教、後詰の援軍を勝頼に要請する（甲陽軍鑑）。
8	1580	9月	勝頼、甲斐で、高天神城に後詰をしないことを決める（甲陽軍鑑）。
		この年	家康、高天神城包囲のための砦を築き、監視をきびしくする。

〈高天神城関係年表〉

18	10	9
一五九〇	一五八二	一五八一
7月	3・29 2・22	1・25 3・22
元高天神城の城主小笠原長忠殺される（浜松御在城記）。	信長に攻められ、勝頼自刃し、武田氏滅亡する。 信長、本能寺の変で明智光秀に殺される。	以前 岡部長教ら、矢文で降服の意向を家康方に伝える（水野文書）。 岡部長教ら討って出て討死する。高天神城落城（浜松御在城記）。 穴山梅雪、家康に降る。

あとがき

大東町教育委員会の方から、「高天神城のことを地域で学習していくための教科書のようなものがほしい」という相談をもちかけられたとき、私は一も二もなく賛成した。地元の郷土史学習講座などに招かれて高天神城の話をするたびに、地元の方がたの、高天神城に寄せる熱い思いがそのまま伝わってくるような体験をしていたからである。

史跡は、たしかに、財政的には国や県や町などのバック・アップなしには保存することはできない。しかし、国や地方自治体などの機関だけでそれをやりぬくことは不可能である。地元の人が、その史跡を自分たちの史跡として考えないことには、いくら財政面で支えたとしても、史跡は荒れる一方であろう。

幸い、高天神城址の場合、『戦国ロマンの里高天神城』というキャッチ・フレーズで、町をあげての「応援団」がある。私は、町民全員が「応援団」と考えているが、さらに高天神城に関することを学んでいただきたいと思っている。学べば学ぶほど、城に対する愛着が増してい

くと考えるからである。

執筆し終って、大東町教育委員会の方がいわれた「高天神城の教科書」が書けたかどうかは正直いって自信がない。高天神城の攻防に関する史料は今後まだ出てくる可能性はあり、おそらく、書き改めなければならないようなことになるだろう。しかし、現在までの高天神城に関する情報で明らかなものは、できるだけ盛り込んだつもりである。本書をたたき台にして、さらに地元の方々によって研究が積み重ねられることを期待している。

最後に、本書巻末に縄張図集を収録することができた。静岡古城研究会の見崎関雄、関口宏行、中世城郭研究会の本田昇氏の三つの図は、現時点における高天神城縄張図の最高傑作である。三者三様の描き形に注目していただきたいと思う。また、貴重な研究成果である縄張図の転載を許可された三氏および関係機関に改めてお礼申しあげる。

平成五年九月

静岡大学教育学部教授 小和田 哲男 記

高天神城の総合的研究

平成五年六月十五日 編集
平成五年九月三十日 発行

著者

静岡大学教育学部教授 小和田哲男

編集・発行

大東町教育委員会

〒四三七―一四

静岡県小笠郡大東町三俣六二〇番地

☎(〇五三七)七二―二二一一代

印刷

有限会社エヌプロ

〒四三一―〇二

静岡県浜松市馬郡町一八八八

☎(〇五三)五九二―八八八一